【用語】勢多郡水沼村―勢多郡黒保根村　釜入―生糸の原料繭を賃挽人に渡すこと

【解説】山中入（さんちゅういり）とよばれる渡良瀬川上流域に位置する水沼村では、一八世紀半ばから原料繭を購入して賃挽（ちんびき）させる製糸形態があらわれた。それは賃挽製糸または釜掛製糸と呼ばれていた。その典型的な経営主として知られたのが、明治七年（一八七四）に本県最初の民間洋式器械製糸所を開設した星野家であった。同家が糸商人として活動を始めたのは享保期前後と推定されているが、製糸経営の実態が明らかになるのは享和年代からである。その製糸経営は仕入れた原料繭を近郷の農家に渡し、その家庭内で糸に挽かせ、挽賃を支払って製品の糸を受け取るというもので、出釜・釜掛などと呼ばれた。

この文書は享和二年（一八〇二）正月からの「釜入帳」の冒頭部分であるが、賃挽人・一回分の釜入量・糸挽きに要する期間・挽糸量などを知ることのできる貴重な製糸経営資料である。原料繭の購入額は最も多い時には二〇〇〇両を超え、その購入地域は山中入りの地元のほか、各年代を通じて沼田・利根東入り（片品・利根村）などの北上州養蚕地帯が五〇～七五％を占めており、星野家の製糸経営を可能にしたのは北上州繭市場の成立がその前提であったことがわかる。その一方で、天保期以後は購入地域を西上州から遠く信州・奥州にまで拡大したことが知られている。なお、集荷した糸はすべて大間々の糸市を介して桐生在方の機屋に売られたのである。